



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



北海道大学苫小牧研究林の調査用林冠ゴンドラから樽前山を望む

日本野外教育学会 第26回大会（北海道） 案内

巻頭言「自然からのあらゆる情報を活用する」 蓬郷 尚代	2
日本野外教育学会第26回大会案内	3~6
日本野外教育学会第5回研究集会報告	7
コラム「書籍紹介に自己反省を込めて」	8~9
2022年度 野外教育に関する学位論文題目リスト	10~11
国際キャンプ会議（ICC）・国際野外教育学会（IOERC）の案内	12~13
事務局便り	14~15

巻頭言 自然からのあらゆる情報を活用する

－ホクレア号から学ぶこと－

蓬郷 尚代（中央大学）

古代ポリネシアの伝統航海カヌー「ホクレア」をご存じでしょうか。星や太陽の動き、波、風、うねりなど自然の力だけを使った「スターナビゲーション（星の航海術）」とも呼ばれる伝統航海術を用いて航海を続けている約20mの大型双胴船カヌー（非動力船）であり、直近では2014年～2017年にわたって世界一周航海をしました。先日、このホクレアが今年6月から2027年までの間、太平洋を一巡する環太平洋航海をすることを知りました。2026年に初航海から50周年を迎えることを受けた記念航海で、乗船予定のクルーたちはメンバーも新たに2021年からトレーニング航海を積み重ねているようです。

この伝統航海術は海図やコンパスなどの計器がない時代から用いられ、18世紀のポリネシア航海記録にも記述されていると言われています。その昔、人々はこの自然からの情報のみを用いたナビゲーションによってハワイ諸島の島々の間を自由に行き来していました。時代とともに伝統航海術は消滅しましたが、伝承をもとに現代に蘇らせようとホクレア号が造船され、1976年ハワイからタヒチへの約4,000kmの初航海を皮切りにこれまで10回の航海をしています。2007年の日本航海の際には日本人初のクルーとして女性クルー（内野加奈子さん）が参加し、その後も少数ではありますが日本人もクルーとして選ばれています。ホクレアが2014年からの世界一周航海をする際にニュージーランドからハワイまでの半年間クルーに抜擢された内田沙希さんが、以前、実習のゲストとして参加して下さったことを思い出し、その時のインタビューデータを見直してみました。

内田さんは当時高校3年生だった2007年に、ホクレアが日本に寄港し三崎から鎌倉、鎌倉から横浜までの最終航路に乗船したことが大きな人生の転機だったと言います。ホクレアに乗船させてもらったことでホクレアの航海術を肌で感じ、まるで自然と対話しているかのようなクルー

たちの所作を目の当たりにしたことが、ホクレア訓練生としてハワイで学び始めるきっかけになったそうです。

内田さんは、ホクレアでナビゲーターをするにはクルー同士の信頼関係なしには成り立たず、カヌーの上では物資も人も限定的であるため、その時在るものを使って工夫して過ごし、他人のありのままを受入れることで嫌悪感を抱くことなく人に対して優しく接することができたと言います。人生で必要なことは海とカヌーから教えてもらったと言っていました。「人種も宗教も、言葉も超えた様々な人が集まり、何が起こっても皆で助け合って一緒に生きていかないとはいけません。自然が牙をむいたら自分たちなんて一瞬で無くなってしまいます。そう思うと、自然を敬う気持ちは自分たちの中から自然に出てくるんです。」と、一回り以上も年下の彼女が話してくれた言葉にいちいち感動し引き込まれていったことが思い出されます。太陽、星、風、波、うねり…、自然からの情報すべてを活用して水平線の先にある見えない島を目指して舵を取ることを格好よいと思えるという彼女の話に共感できたのは、これまでの自分と海との関わり方や千足耕一先生（東京海洋大学）とともに現在も取り組んでいるサバニ帆漕レースでの慶良間海峡横断経験があったからなのかもしれません。

今年、再びホクレアが航海をすることで、当時の内田さんのようにホクレアとの偶然の出会いがきっかけとなってホクレアクルーやナビゲーターを目指す若者が世界中から現れ、伝統航海術をはじめとした伝統文化がこれからも継承されていくのだろうと思います。私たちの日常生活は、自然からの情報をそれほど頼りにしなくても生活できる便利な環境にあります。しかし、自然の中に身を置き、自然からのあらゆる情報を活用しながら自然に合わせた所作ができるスイッチはいつまでも持ち続けていたいと思います。

日本野外教育学会第26回大会（北海道）のご案内

第26回大会実行委員長 前田 和司（北海道教育大学岩見沢校）

大会テーマ 「北海道の大自然を感じ、未来を見据え、これからの野外教育を考える」

今年度は、北海道教育大学岩見沢校にて、日本野外教育学会第26回大会を開催いたします。ご存知の通り、北海道はひとびとの暮らしが自然と入り組むように成り立っているところです。農林水産業はもとより、四季折々の生活文化も、自然と対峙し、あるいは自然に生かされながら育まれてきました。北海道の野外活動もそのひとつであり、各地で独自の活動が行われ、それらを若い世代につなげていこうとする野外教育の取り組みも、それぞれの地域のひとびとの手によって連綿と引き継がれている土地であると言えます。しかし、この1年間はコロナ禍に加え、国際関係がけっして安定したものではないことを私たちはまざまざと知らされました。このような時代にあって、自然と向き合う中から、私たちはいかなる未来を思い描き、それぞれの野外教育を構想すべきなのか。そのようなことを考えつつ、今回のテーマを設定させていただきました。7月初旬の北海道は、濃い緑と花々におおわれ、もっとも魅力的な季節かもしれません。ぜひ多くの会員の皆様に参加いただき、この北海道にて、有意義な時間を過ごしていただければと考えております。

1. 期日 2023年7月1日（土）～2日（日）

【第2日目：7月2日（日）】

8:30～ 受付

2. 会場 北海道教育大学岩見沢校

9:00～ 口頭発表

（〒068-8642 北海道岩見沢市緑が丘2丁目34-1）

昼食・休憩

13:30～ 企画委員会企画シンポジウム

3. 大会日程

15:30～ 閉会式

【第1日目：7月1日（土）】

8:30～ 受付

9:00～ 自主企画シンポジウム

11:30～ 理事会

13:00～ 開会式

13:15～ 基調講演

『気候変動や生物多様性の視点から、北海道の
森林の「いま」と「これから」を知る』
講師 中村 誠宏氏

（北海道大学北方生物圏フィールド科学
センター・森林圏ステーション教授）

14:25～ シンポジウム（実行委員会企画）

シンポジスト

赤司 展子氏（札幌新陽高等学校校長・

ウィーシュタインズ株式会社代表取締役）

伊原 鎮氏（学校法人フレンド恵学園理事長）

青野 範子氏（十勝岳温泉株式会社代表取締役）

16:00～ ポスター発表・実践報告

17:00～ 総会

4. 第26回大会の詳細案内について

大会の詳細案内の確認、各種申込、原稿提出は、第26回大会専用ウェブサイトから行ってください。

<https://26th-hokkyo.joes.gr.jp/>

5. 研究発表・実践報告の申込

【申込期限：4月21日（金）】

*原則として、大会専用ウェブサイトから申込みください。

*研究発表は、口頭形式とポスター形式があります。実践報告は、ポスター形式のみです。

*若手優秀発表賞（別紙参照）に申し込む人は、同時に申し込んでください。対象は35歳未満です。

6. 抄録原稿の提出

【抄録原稿提出期限：4月28日（金）】

*原則として、大会専用ウェブサイトから申込みください。

*「発表資格と注意事項」および「抄録原稿提出要領」に従ってください。

7. 自主企画シンポジウムの申込および原稿提出

【申込期限：4月21日（金）】

【抄録原稿提出期限：4月28日（金）】

自主企画シンポジウムは、第26回大会に参加する学会員自らが、テーマ、司会者、話題提供者、指定討論者等を設定して実施されるシンポジウムです。自主的にシンポジウムの企画を温めてきた学会員、若手研究者の申込をお待ちしています。企画を希望する会員は、原則として、第26回大会専用ウェブサイトから申込みをしてください。

※「自主企画シンポジウム抄録原稿提出要領」に従ってください。

8. 大会参加の申込及び参加費納入

【参加申込・参加費納入期限：5月12日（金）】

*原則として、第26回大会専用ウェブサイトから申込みした上で、必ず参加費等を納入してください。

9. 若手優秀発表賞

若手研究者の研究活動を推進するため、研究のオリジナリティ、有用性、発表方法、発表技術について審査し、表彰します。受賞者には賞状および副賞を授与します。選考対象者は、以下の要件を満たしている必要があります。

- (1) 本学会の正会員（一般/学生）である。
- (2) 研究発表（口頭）の筆頭および演者である。
- (3) 年齢が35歳未満（当該年次大会時）である。
- (4) 発表申込時に若手優秀発表賞の審査を申請したもの（エントリー制）。

対象の方は研究発表申込の際に合わせてエントリーしてください。

10. 参加費

	事前申込	当日（事前申込期限後）
正会員（一般）	5,000円	6,000円
正会員（学生）	3,000円	4,000円
非会員	3,000円/日（一般）	2,000円/日（学生）

※非会員の参加費は、抄録集代（2,000円）を除く、期限前後ともに同額。

※参加費の納入方法については、オンライン決済サービス「peatix」で行います。手続きは、大会専用サイトから行ってください。一旦納入された参加費等は返金いたしません。

11. 宿泊および食事について

・宿泊施設は、岩見沢市内の市街地（徒歩圏内）および郊外（車が必要）に数軒あります。

市街地：岩見沢ホテル5条、岩見沢ホテル4条、ホテルサンプラザ、ホテルニューカワチュウ

郊外：三笠天然温泉太古の湯、メープルロッジ、北村温泉ホテル

- ・大学構内のキャンプ指定地を無料で開放します。申込みは学生優先で先着順とします。北海道教育大学岩見沢校アウトドア・ライフコース学生が管理および案内をします。装備については、希望者に対してご案内します。
- ・大会期間中の昼食を含めた食事について、基本的には各自でご準備ください。大学近隣にコンビニエンスストア等があります。大学にある食堂および売店の営業はありません。
- ・大会事務局では、大会1日目および2日目の昼食を、事前注文による弁当販売（700円）をします。

12. 会場までの交通機関

「札幌駅からの移動」

- ・JR 函館本線、岩見沢駅まで、特急列車約25分、普通列車約45分

→岩見沢駅から大学まで

路線バスで教大前バス停（大学正門近く）まで約8分～25分、タクシー約5分、徒歩約30分

※路線バスは本数が少ないことと系統によって所要時間が異なるため、別途、第26回大会専用ウェブサイトでお知らせする予定

- ・高速バス（北海道中央バス、高速いわみざわ号）

市立病院前バス停まで約50分

→バス停から大学まで、徒歩約15分

「新千歳空港からの移動」

- ・JRは、札幌駅経由
- ・車は、大学まで約60分（大学構内の駐車場を利用することが可能です）

13. 託児

保育室などの専用の部屋の用意はできませんが、託児をいたします。対象は、原則として2歳～6歳の未就学児とします（小学生についてはご相談下さい）。託児には、保育士資格を所有している者があたります。料金については、一部を大会運営費で補助し、お子様ひとりあたり1日

6,000円をご負担いただきます。詳細は個別に対応いたしますので、参加申込時に申請していただくとともに、大会事務局までメールでご連絡ください。

【日時】

2023年7月1日(土) 12:30~18:00

2023年7月2日(日) 8:30~15:30

※昼食時はできるだけお子さまをお迎えにいらしてください。

14. その他

- ・エクスカージョンを、6月30日(金)に、札幌近郊、支笏湖周辺、富良野周辺で実施を予定しています。詳細のご案内は、第26回大会専用ウェブサイトにて行います。
- ・第26回大会において、懇親会は実施いたしません。

15. 第26回大会事務局

〒068-8642 北海道岩見沢市緑が丘2丁目34-1
北海道教育大学岩見沢校 山田亮
日本野外教育学会第26回大会事務局

E-mail: 26th-hokkyo@joes.gr.jp

電話: 0126-32-0392

※お問い合わせは、E-mailでお願いいたします。

発表資格および注意事項

◆発表の資格に関すること

1. 筆頭者および演者は、正会員、名誉会員、団体会員(一般)、賛助会員、および大会実行委員長が認めた者とする。ただし、非会員であっても外国人研究者に関してはこれを認める。
2. 共同研究者には非会員が名前を連ねても差し支えない。
3. 筆頭者および共同研究者に関して、会員は年会費を期日までに完納していること。また、共同研究者の非会員は所定の発表投稿料(3,000円)を期日までに納付すること。

◆発表の方法等に関すること

1. 原則として未発表の研究に限る。
2. 発表者は対面での参加を求める。
3. 筆頭の発表(口頭発表、ポスター発表、実践報告)は、1回の大会において1題目に限る。
4. 発表の言語は、日本語あるいは英語とする。
5. やむをえない理由で演者が発表できなくなった場合、事前に大会実行委員長の承認を得て、共同研究者による代演を認める。

◆抄録原稿に関すること

1. 一度提出した抄録原稿の訂正はできない。
2. 発表された抄録は、学会ウェブサイトに掲載する。

◆その他

1. 本学会が定める倫理規定を順守すること。
2. 以上の発表要件に満たない研究は、発表を取り消す場合がある。

研究発表(口頭発表・ポスター発表)抄録原稿提出要領

※大会専用ウェブサイトから「研究発表抄録原稿フォーマット」をダウンロードして、作成してください。

1. 原稿枚数: 口頭発表はA4版2頁、ポスター発表はA4版1項とします。原稿は、白紙を縦置きにし、天地左右に25mmの余白を設定し、ワードプロセッサ等で作成してください。
2. 演題: (14ポイント・ゴシック体) 演題は1行目(必要があれば2行目まで可)に、副題がある場合は改行してそれを記載して下さい。また、演題(あるいは副題)の下の行に、英文タイトルを記載して下さい。
3. 氏名: (12ポイント・明朝体) 英文タイトルの下に1行空白を設け、その下の行に氏名と()内に所属を記載して下さい。また、共同研究者も同様に連記し、演者氏名の前に○印をつけて下さい。
4. キーワード: (10ポイント・明朝体) 氏名の下に1行空白を設け、その下に発表内容のキーワード(2~5個)を記載して下さい。
(例) キーワード: ○○○○、○○○○、○○○○
5. 本文: (10ポイント・明朝体) キーワードの下の1行空白を設け、その下から本文を記載して下さい。本文は、1行あたり20~22文字の2段組とし、1頁の行数は、演題の行を含め40行程度とします。
6. 図・表および写真: 図・表および写真は、原稿に直接挿入し、「通し番号」と「見出し」をつけてください。
7. 提出方法: 原則として、第26回大会専用ウェブサイトから、原稿データをweb提出してください。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に掲載します。
8. 原稿締切: 2023年4月28日(金)
9. その他: 上記の提出要領に沿わない原稿は受け付けません。なお、上記以外に「野外運動データベース(ROP)」登録上必要な情報を提供していただく場合があります。

実践報告（ポスター）抄録原稿提出要領

抄録集に実践報告の概要を掲載します。以下、原稿の作成・提出の要領、留意事項をご確認ください。

1. 原稿内容：抄録集に概要を掲載するため、「演題」「英文タイトル」「氏名と所属」「概要（200字以内）」を作成して下さい。また、演者氏名の前に○印をつけて下さい。
2. 提出方法：第26回大会専用ウェブサイトから、原稿データをweb提出して下さい。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に記載します。
3. 原稿締切：2023年4月28日（金）
4. その他：上記の提出要領に沿わない原稿は受け付けません。

自主企画シンポジウム 抄録原稿提出要領

抄録集に自主企画シンポジウムの紹介文を掲載します。以下に、原稿の作成・提出の要領、留意事項をご確認ください。

1. 原稿内容：「シンポジウムテーマ」、「テーマの英文」

「企画担当者（所属・役割も含めて）」「企画の趣旨（400字程度）」を作成して下さい。大会実行委員会でA4版1/2頁程度に編集し、抄録集に掲載します。なお、登壇者については、氏名、所属、イベントでの役割（コーディネーター、話題提供者、指定討論者など、ご自由に設定して下さい）を明記して下さい。

2. 提出方法：第26回大会専用ウェブサイトから、原稿データをweb提出して下さい。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に記載します。
3. 原稿締切：2023年4月28日（金）
4. 留意事項
 - ・申込多数やテーマが重なった場合は、大会事務局で調整の上、5月下旬に申込者に決定連絡する予定です。
 - ・テーマや趣旨が本学会の趣旨と著しく異なっていたり、事前の申込内容と著しく違っていたりする場合などは、実行委員会の判断で企画を取りやめていただく場合がありますので、十分にご留意ください。
 - ・原稿提出後に、企画内容・場所・機材等について、申込者にメール等で連絡調整をする予定です。

第5回研究集会報告

青木 康太朗 (國學院大学)
岡田 成弘 (実行委員長：東海大学)
瀧 直也 (信州大学)
張本 文昭 (沖縄県立芸術大学)

伊原 久美子 (大阪体育大学)
高橋 徹 (岡山大学)
野口 和行 (企画委員長：慶應大学)
吉松 梓 (明治大学)

2023年1月22日(日)に第5回研究集会が明治大学駿河台キャンパスで開催されました。第5回研究集会は、対面式とオンライン配信(zoom)のハイブリッド式で開催されました。参加者には、後日アーカイブ配信もされました。研究集会は学会員の研究推進に資することを目的に企画委員会事業として開催しており、5回目の今回は実行委員で協議した結果、「統計的手法」と「質的分析の実際」がテーマとなりました。

午前中は「統計的に有意で満足していませんか？野外教育研究における統計手法を更新しよう」というタイトルで、信州大学の島田先生にご講演いただきました。まず初めに、統計的有意とはそもそもどういうことなのかという話をいただき、新しいスキーブーツの開発という事例をもとに統計的仮説検定の考え方について説明をしていただきました。また、js-STAR、HAD、ANOVA君という統計ソフトウェアについて、それぞれの特徴や使い方を紹介していただきました。後半は、サンプルサイズの問題点、効果量の考え方、信頼区間の利用について、解説いただきました。そして、集団レベルと個人レベルが存在するデータの分析手法として、野外教育研究領域ではまだまだ馴染みのない「マルチレベルモデル」の紹介をしていただきました。会員からの質問も活発に行われ、統制群、欠損値の扱い、t検定の考え方について、島田先生と議論が行われました。講演では、実際にソフトウェアに入力・分析をしながらお話しいたいただき、分析の進め方について具体的なイメージを持つことができました。紹介されたソフトウェアで分析を是非やってみたいという声も参加者の中から聞かれました。

午後は、「この研究、実際どうやるの？研究方法の実際—質的研究・インタビュー分析—」というタイトルで、東京大学の能智正博先生にご講演いただきました。能智先生

の講演では、初めに、質的研究の特徴と背景について解説していただき、質的データを分析するための基礎概念を理解しました。そして、質的データ分析を実際に体験しながら学ぶワークを実施していただきました。各自が、データをしっかり読み込んで、気になる箇所を確認し、まとまりごとに名前をつけていく見出し付け(コーディング)を行いました。その後グループを作成し、ダブルブラインド方式で他の人の見出しを評価してきました。各自に評価が返却されましたが、複数の人に納得・共感してもらえるような見出しをつけた人は高得点になっていた一方で、思ったより評価が低かったという人もいたようです。次に、カテゴリー化について解説していただき、カテゴリー化のワークを行いました。見出しのリストと逐語録を見て、カテゴリーを作成し、ペアごとに共有してもらいました。講演の最後に、能智先生の実際に作成したカテゴリーとその関連のモデルをお示しいたいただき、カテゴリーの関連付けについて解説をしていただきました。質疑応答も活発に行われ、カテゴリー化の根拠や論文投稿の際の書き方、分析の人数について議論が行われました。

今回の研究集会では、「当日は参加できないけれど、後日視聴したい」という方も多く、50名以上の申し込みがありました。当日の対面参加は13名と少なかったのですが、昨年10月の学会大会同様、対面で研究についてのディスカッションができたことは、非常に有意義でした。今回のテーマは、我々が研究で用いている手法を改めて考え直すきっかけになったと思います。この研究集会が、会員や学会全体の研究推進に貢献することを願っています。ご参加・ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

なお、講演の詳細は年度内に発刊される「野外教育研究」に掲載されますので、是非ご覧ください。

(文責：岡田 成弘)

コラム「書籍紹介に自己反省を込めて」

張本 文昭（沖縄県立芸術大学）

『WILDERNESS AND RISK -荒ぶる自然と人間をめぐる10のエピソード-』 ジョン・クラカワー著、山と溪谷社（2023年1月5日初版発行）

まず、ニュースレターに書籍紹介のようなコーナーはなかったものの、投稿を認めてくださった広報委員会に御礼申し上げます。そして書籍の紹介とともに、本稿は強い自己反省に基づいて書かれたことを予めお伝えします。

張本¹⁾は2019年、イニシエーションとしての冒険教育を論じた際、北米の先住民やイヌイット社会におけるイニシエーションであるVision Questについて触れ、冒険教育プログラムとしてのソロに関して考察しており、そこでは以下のような引用箇所がある。

アメリカでは「Vision Quest」という名称の冒険教育プログラムが非行少年の矯正の機会として提供されている²⁾。各州の少年裁判所の委託を受けた事業者が実施しており、砂漠を中心とした荒野を幌馬車で移動しながらテント泊を続けるというもので、山岳縦走、ロッククライミング、クロスカントリースキーなどを取り入れたウィルダネス・キャンプや、ヨットによる海洋訓練なども実施されている。プログラムを経た非行少年たちの更正率は公立少年院の2倍とされる。

上記は、Vision Questのプログラムに同行取材した日本人新聞記者による1983年の論文²⁾から引用した。そこではプログラムの実際や少年裁判所における制度化、効果の高い更正率などが紹介されており、全面的に肯定・支持する内容となっている。よって張本はイニシエーションと冒険教育との関連において論文中に引用したのであった。

ところで、本稿で取り上げる『WILDERNESS AND RISK』の著者ジョン・クラカワーは、デビルズ・サム（アラスカ）を新ルートで単独登攀するなどの記録を持ち、また1996年のエベレスト大量遭難事故の当事者の1人でもある。そのような経歴もあることから、彼は登山などを中心として多く

のルポルタージュを発表しており、『空へ』や『荒野へ』などの著作で知られる。本書は、かつて複数の雑誌に掲載されたルポ記事を中心として、高所登山、洞窟探検、クライミング、サーフィンなどにおける10のエピソードを一冊の書籍として発刊したものである。

本書では、その1つのエピソードとして、アメリカにおける非行少年を対象としたウィルダネス・セラピー・プログラム（WTP）³⁾が取り上げられている。詳細は本書に譲るとして、そこに書かれるのは一部の卑劣なWTPの実態であった（もちろんアウトワード・バウンドをはじめとしてアナサジ財団などによる真つなプログラムも紹介されている）。およそ我々が知る冒険教育の内実とはかけ離れた児童虐待やネグレクトを繰り返す酷いWTPの運営実態やビジネス化の背景、大金を叩いてもすすがる非行少年の親、それらを改善できないアメリカ社会の姿がそこにあった。読みながら、日本では有り得ないだろうと思うと同時に、胸が詰まるような気持ちになった。それくらい酷い実態があぶり出されている。

このエピソードの中に、「ビジョン・クエストという悪名高い野外プログラムでは、これまでにすくなくとも16名にもおよぶ死者を出している。（p.171）」との記載があり、目が止まった。自分が論文として肯定的な意味で引用した団体名であることに大きなショックを覚えた。イニシエーションの構造や機能を現代的にアレンジし、冒険教育またWTPとして提供している素晴らしい取り組みであると認識して引用したのであったが、それとは正反対の内容が書かれた文を読み、非常に落胆したと同時に、猛反省することとなった。

研究論文内で引用される文献は学術誌に掲載された原著論文から学会発表抄録、インターネット情報まで多種多様である。今回本書を読んで再認識したのは、論文内におい

て文献を引用する際には、様々な情報源から複数の文献を
探し出し、より客観性のある文献を選択する重要性であつ
た。特に張本¹⁾のようなナラティブレビューの場合、どう
しても著者の主観やバイアスが入り込んだ文献が選択され
ながら論が展開されるため、留意する必要性を改めて強く
感じた。

上記の張本の個人的反省を抜きにしても、本書は野外教
育に携わる者であれば、また、より冒険性を志向する者で
あれば、全編にわたって興味深く読み進めることが出来る
であろう。世界有数のビッグウエーブで起きたサーフィン
事故、エベレスト登山におけるシェルパたちの怒り、NASA
の研究者が地下 300m で 4 日を過ごす調査研究、ブラック
ダイヤモンド社が設立されるきっかけとなるクライミング
事故、その他、人を寄せ付けない荒ぶる自然に挑む人間た
ちの姿があぶり出されている。多くの意味でインパクトの
ある一冊であった。

- 1) 張本文昭 (2019) : イニシエーションとしての冒険教育
-冒険教育とイニシエーションの構造比較-、野外教育研
究 23 (1) : 19-36
- 2) 小畑耕一 (1983) : 非行少年を乗せた現代の幌馬車隊、
青少年問題 30 (5) : 4-13
- 3) この WTP の効果や研究課題については以下に詳しい。
坂本昭裕 (2002) : アメリカにおける非行少年に対する
アウトドア体験療法 -心理社会的効果に関する実証的研
究の動向と課題-、臨床心理身体運動学研究 3 : 15-34

2022年度 野外教育に関する学位論文題目リスト

日本野外教育学会広報委員会は、会員のみなさまにご協力いただき、国内の大学の学部生・大学院生が昨年度執筆した野外教育に関する学位論文（博士論文、修士論文、学士論文）の題目情報を収集し、題目リストを作成しました。会員のみなさまの情報交換や研究の動向把握などにご活用ください。

- ・本リストは日本国内で執筆された野外教育に関するすべての学位論文の題目情報は網羅していません。
- ・2023年2月末までに会員の方々から提供していただいた情報をもとに作成しています。
- ・執筆者本人の許諾を得て、指導教員が野外教育に関係する内容であると判断した題目を掲載しています。

博士論文（大学院博士後期課程）

大学名	学生氏名	論文題目	研究科	専攻・専修名	指導教員名
筑波大学大学院	坂本 昭裕	WPT型キャンプセラピーにおける発達障害児の自己形成に及ぼす影響	人間総合科学研究科	コーチ学専攻	(論博)

修士論文（大学院博士前期課程・修士課程）

大学名	学生氏名	論文題目	研究科	専攻・専修名	指導教員名
仙台大学大学院	種部 廉	大学生キャンプカウンセラーの成長要因-大学キャンプ実習の経験に着目して-	スポーツ科学研究科	スポーツマネジメント領域	井上 望
筑波大学大学院	川島 才路	組織キャンプにおける指導経験が学生スタッフのライフスキルに及ぼす影響	人間総合科学研究科	体育学専攻	渡邊仁
東京海洋大学大学院	宇慶谷 望	エコツアーにおける熟練パドリングガイドのセーフティマネジメント	海洋科学技術研究科	海洋管理政策学専攻	千足耕一
東京学芸大学大学院	TRAN THI THUY DUONG	ベトナムと日本の学校制度における体験活動の比較についての研究 -小学校教育に着目して-	教育学研究科	次世代日本型教育システム研究開発専攻	小森 伸一
	名嘉真 静香	サウンド・エデュケーションの実践を通じた自然音が大学生にもたらすリラックス効果についての研究 -野外にて音を聴取する際の観点に着目して-			
	野口 皓	野外活動における音楽体験によって生起する認識や気づきについての研究 -教員養成大学の実習参加者を対象としたケーススタディー			
東海大学大学院	相原 太郎	スキー愛好者のレジャー関与とレジャー満足度・Well-beingの関係性	体育学研究科	体育学専攻	松本秀夫
天理大学大学院	江川慶衣子	組織キャンプがスポーツチームに所属する高校生の社会的スキルに及ぼす影響 ~質的・量的アプローチを通して~	体育学研究科	体育学専攻	稲葉慎太郎

学士論文（学部）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
北海道教育大学 岩見沢校	佐藤 武	日本における雪崩事故防止に関する現状と課題 -日米での雪崩事故防止の取り組みの比較-	教育学部	芸術スポーツ文化学科 スポーツ文化専攻 アウトドア・ライフコース	濱谷 弘志
	深谷 舞波	ロッククライミング体験が自己成長主導性に与える影響			
	鈴木 友梨	ヒヤリハット体験から考える山岳事故要因に関する研究			
	橋本 海	自転車旅の及ぼす影響			
	相原 歩果	トレイルランニング大会参加がメンタルヘルスに及ぼす影響			
	神尾 倫太郎	森のようちえんが子どもの発達に及ぼす影響 ~茨城県つくば市の森のようちえんコロボックルの事例から~			
	小森 陽翔	自然体験活動が青少年のレジリエンスに与える影響			
	山崎 由菜	自然体験活動を導入した総合的な学習の時間が生徒に及ぼす効果			
仙台大学	中村 優花	スノーボードクロス競技における外的要因が選手の心理的ストレスに及ぼす影響	体育学部	体育学科 スポーツコーチングコース	井上 望
	八木 彩花	キャンプ体験が児童の視野に与える影響			
	阿部 亮太	大学キャンプ実習における興味と自己成長の関係について			
	内山 優衣	野外活動がアスリートに与える影響 ~メンタル状態の調査からチームビルディングとしての野外活動の可能性を探る~			
	小関 昂寛	キャンプ実習がスマホ依存に与える影響			
	菊田 遥香	野外活動が女子体操選手の集団凝集性に与える影響			
	喜嶋 美優梨	大学キャンプ実習中に起こるヒヤリハットの研究~参加者・カウンセラーに視点を置いて~			
	喜多島 龍	大学スポーツ競技者へのSDGsの実施啓蒙がSDGs認知度・実施率に与える影響			
	工藤 精修	野外活動における睡眠時の環境の変化が睡眠の質と疲労度に対して及ぼす影響			
	小松 沙菜	キャンプカウンセラーのキャンパーに対する支援的リーダーシップの獲得過程 ~大学生カウンセラー3名の事例より~			
	鹿内 葵	子どもの頃の環境と大学生の社会人基礎力の関係			
	篠澤 佑麻	登山トレーニングが部活動を行う学生に与える影響 ~基礎的体力に着目して~			
	鎌水 梓沙	シェイプアップを目的とした運動が下肢の体脂肪率の減少と筋力増加に与える影響			
菊池 輝	食育を取り入れた野外教育の可能性	スポーツ栄養学科			

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
筑波大学	伊藤 百合子	植村直己の単独行動から学ぶ現代的な教育意義に関する研究	体育専門学群		渡邊 仁
	小丸 未来	新聞におけるグランピングに関する記事の内容変遷			
	林 わこ	組織キャンプが高校生の自然観に与える影響			
	永山遼真	オリエンテーリング競技を始める動機に関する研究			
	藤川 萌	学校教員の自然体験活動に対する認識 ―資質能力と教育的効果に着目して―			坂本 昭裕
大東文化大学	三友 采葉	第35回 関東大学女子サッカーリーグ戦における1部所属チームの戦績とフットワークタイプの関係	スポーツ・健康科学部	スポーツ科学科	中村 正雄
東京海洋大学	荒井 良乃介	釣り(フィッシング)の現状と諸問題および持続可能性に関する研究	海洋生命科学部	海洋政策文化学科	千足 耕一
	今西 龍大	学生時代にセーリングを行っていた者のセーリング継続要因			
	鈴木 早彩	被引浮体における安全対策の実態と課題			
東京学芸大学	赤羽 響	「ホリスティック教育」としての野外教育の可能性について ―「三大学習要素」に着目した小学校教育への提言も交えて―	教育学部	初等教育教員養成課程 保健体育選修	小森 伸一
	尾上 美月	イニシアティブゲーム体験が及ぼす社会的スキルの変容に関する研究 ―大学生を対象とした初年次教育授業に着目して―			
	片寄 伶	自然体験活動の多寡(自己評価)が信頼感に与える影響についての研究 ―大学生を対象にした男女の性差にも着目して―			
	是枝 顕	運動競技経験における個人・団体種目の違いによる対人信頼感に関する研究 ―大学生を対象とした性差にも着目して―			
	酒井 圭太	運動系部活動経験の有無が及ぼす規範意識の形成についての研究 ―大学生を対象にして―			
	佐古 ふうり	練習中の声かけに関わる体験がモチベーションに関わる影響についての研究 ―「優越感」「劣等感」という選手の特性の視点から―			
	和田 千輝	ライブ前におけるアーティストの映像視聴体験が演奏パフォーマンスに関わる心理的要因にどのような影響を及ぼすのか ―軽音サークルに所属する大学生を対象として―			
東京女子体育大学	佐藤 晴香	南アルプス北岳周辺の山小屋に対する利用者の評価―テキストマイニングによる口コミ分析を用いて―	体育学部	体育学科	永井 将史
	青山 菜樹	キャンプ実習が女子大学生の精神的健康に与える影響			
	関口 玲衣	群馬県内居住者におけるスキー場の選好行動に関する研究			
	野谷 菜摘	女子体育大生における野外活動の実施状況と過去の野外活動経験との関係			
	原 つくし	不登校児童・生徒を対象としたキャンプの効果に対する保護者の期待と実感―継続的参加者の保護者を対象として―			
東海大学	富山 桃加	大学生がアウトドアブランドをネットショッピングで購入するプロセスについて	体育学部	生涯スポーツ学科	岡田 成弘
	齋藤 伊吹	懐かしい自然音が大学生に与える影響			
	田邊 咲歩	大学生が抱くグランピングのイメージ			
新潟医療福祉大学	手塚 友貴乃	キャンプがひとり親家庭の母親の子育て意識に及ぼす影響	健康科学部	健康スポーツ学科	吉松 梓
	エバサカ テレサ	積極的休養としての野外活動がアスリートの気分と自覚疲労に与える効果			
	大伴 一志	大学生の性格特性と野外活動種目選択との関連			
	木嶋 和海	キャンプの継続動機に関する文献研究―コロナ禍に着目して―			
	齋藤 善美	野外炊事での不便さが大学生に及ぼす心理的影響			
	塩入 唯翔	「雪マジ」世代におけるスキー・スノーボードの選択理由について			
	高木 玲奈	ひとり親家庭を対象としたキャンプにおける子どものアタッチメントの変化			
	田中 皓暉	組織キャンプにおける大学生ボランティアの自己効力感とGRITの変容			
	目黒 冬真	野外活動実習が大学生の創造性に与える影響			
	矢坂 昇太	キャンプ実施形態とレジャー志向の関係性について			
	渡邊 尚也	野外活動実習のプログラムによる心理的リラクゼーションの差異			
信州大学	瀧本 恵理子	野外活動における過酷な経験がその後の参加意欲に及ぼす影響	教育学部	野外教育コース	瀧 直也
	森下 隆司	長野県内のキャンプ場における立地と施設充実度及び特色の関係性			
	湯本 将太	野外活動が社会的スキルに与える影響			
京都教育大学	藤井 涼将	大学キャンプ実習における参加者の性別役割分担意識	教育学部	体育領域専攻	遠藤 浩
	井上 泰佑	大学キャンプ実習が参加者の他者受容と対人恐怖心性に及ぼす影響			
	今西 生	大学キャンプ実習が参加者の達成動機および親和動機に及ぼす影響			
天理大学	馬田 和樹	大学生のキャンプ実習における孤独感とスマートフォン依存傾向の関係	体育学部	体育学科	蓬田 高正
名城大学	北野 礼	正課内活動の野外活動による社会人基礎力の定着 ―大学での諸活動の関係も踏まえて―	人間健康学部	スポーツ健康学科	遠矢 英憲
	齋藤 瑞貴	大学生の水泳の主観的得意度別にみるスノーケリング学習の効果 ―講義、プール実習、海洋実習を通して―			

「ICC2023 Tarragona・Spain」に参加しませんか？

針ヶ谷 雅子（明治大学）

ICC (International Camping Congress) 2023 は、1987年にキャンプや野外活動への熱意、知識、取り組みを分かち合うために、キャンプや教育の専門家の有志によって設立された世界的な組織である ICF (International Camping Fellowship) が、今年10月にスペイン・タラゴナで開催する国際会議です。カタルーニャ地方にはキャンプの歴史と文化が深く根付いており、異なる文化が混在する魅力的な場所です。今大会は特に、研究者のために「リサーチ・フォーラム」を準備しましたので、日本野外教育学会のみなさんにも紹介いたします。

(1) 大会テーマ：Fem Pinya - 共に高みを目指そう！

「pinya (ピニャ)」とは、カタルーニャ地方の伝統的なお祭りで建てられる「castell (カステル) =人間の塔」の台座のことです。ピニャが大きければ大きいほど、高い塔を作ることができます。ICF は、世界中のキャンプの多様性によって強固な基盤をつくり、最高の“カステル”を創り上げました。若者の力を引き出し、新たな高みへ上がるために、これからも“Fem Pinya” 活動を続けたい！という想いをこのテーマに込めました。

(2) ICC2023 では：500名を超えるキャンプの専門家がスペインや世界中から集まり、知識を分かち合い、ネットワークを作るため、さまざまなプログラムを準備しています。

- ・現地の施設や活動を見学するスタディツアー
- ・世界から招いた専門家による基調講演やシンポジウム
- ・さまざまなプレゼンテーション（プログラム、マネジメント、スタッフトレーニング etc,）
- ・リサーチ・フォーラム（アカデミックな手順を踏んだ研究発表）
- ・パーティーや交流プログラム

(3) 大会概要：詳しくはWeb サイト

日時：2023年10月4日（水）～8日（日）プレ・ポストツアーあり

場所：Tarragona・Spain

PortAventura Convention Centre

(PortAventura World and Resorts)

参加費：フル参加・Early Bird（～4/30）の場合

会員・690€／非会員・920€

Web サイト：<https://www.icc2023spain.org/>



お気軽にお問い合わせください。

針ヶ谷雅子 (ICF Board Member)

mharigaya@icfconnect.net



IOERC10 参加のためのインフォメーションセッションのお知らせ

岡田 成弘 (東海大学)

以前からこのニュースレターでお知らせしている通り、来年2024年3月2日～8日に、国立オリンピック記念青少年総合センターで、10th International Outdoor Education Research Conference (IOERC10) が開催されます (<https://ioerc10.org/>)。このカンファレンスは、2～3年に1度、イギリスやオーストラリア、カナダ、ニュージーランドなどで開催されてきました。私は、2018年の第8回オーストラリア大会に初めて参加し、昨年2022年には第9回イギリス大会にも参加しました。世界中から野外教育の研究者や実践者が集い、研究発表・フィールドトリップなどを通して、多くの人と交流することができました。第8回大会は、「初めてキャンプに参加する子はこういう気持ちなのだろうな」と緊張と不安を抱えながらの参加でしたが、オープンマインドな雰囲気と参加者の積極的かつ受容的な姿勢のおかげで、初めての英語での口頭発表もうまくいきました。また、カンファレンスでは様々な国の人と話をしました。世界の野外教育は、本当に多種多様で、研究の視点も様々です。第9回のイギリス大会では、自分の研究につながるアイデアも生まれました。自分の国の野外教育や自分の実践を考え直すきっかけにもなりました。本当に多くの刺激をもらえるカンファレンスです。もっと多くの日本人研究者・実践者と一緒に参加したいと思いました。

その IOERC が、今回は日本で開催されることになりました。実行委員は、日本野外教育学会の会員が中心です。国際カンファレンスデビューにはもってこいです。学会員のみなさんにも是非参加してもらいたいです。さらに、研究発表にもチャレンジしてもらいたいです。発表申込締切は2023年5月末で、Oxford Abstract というシステムからエントリーできます (IOERC の web サイトからアクセスできます)。IOERC は英語が母国語ではない国からもたくさん参加しています。英語が得意ではなくても、話をじっくり聞いてくれます。「英語ができるのが当たり前」ではなく、「英語が苦手な人もいるよね」という雰囲気です。ですから、国際カンファレンスでの初めての研究発表にも最適です。大学院生にもこのチャンスにチャレンジしてもらいたいです。

とはいうものの、英語でエントリーしたり、レビューを受けたりすることは、やっぱりハードルが高いと思います。Web サイトも全て英語です。そこで、初めて参加する方をアシストするために、IOERC 10 参加及び発表申込についてのインフォメーションセッションを開催したいと思います (もちろん日本語です)。エントリーの方法やレビューのプロセス、カンファレンスの様子などをお伝えして、みなさんの質問や疑問にお答えします。実際に発表してみて感じたことや、他の人の発表の様子なども、具体的にお伝えします。5月にも開催したいと思います。できるだけ4月に参加してもらえるように、複数の時間帯を設けました。時間は30-40分程度です。Zoom で開催しますので、国際発表に少しでも興味がある人は是非参加してください。

日時：4月17日(月) ①12:30～13:00 ②17:30～18:00 ③20:00～20:30

URL : <https://us02web.zoom.us/j/7267459580> ミーティング ID: 726 745 9580

備考：参加申込不要。開始5分経過しても参加者がいない場合は、中止します。

問合：岡田成弘 (IOERC 実行委員研究担当) ms-okada@tsc.u-tokai.ac.jp



日本野外教育学会